

## 宮川家文書目録解題

宮川家は寛文2年(1662)、祐筆に召し抱えられた宮川嘉兵衛仍香を初代とする、150石取りの榊原家の家臣である。わかる限りで系譜をたどると次のようになる。

仍香(～元禄16年)－頼長(～延享2年)－頼茂(～宝暦7年)－頼元－<この間不明>－義忠(天保11年)－頼安(～明治15年)－頼徳(～大正10年以降)－謙太郎  
史料群の内容は以下の四つに大別できる。

一つ目は、代々中老を務めた清水家関連の資料である。幕末の清水家の当主清水広博は、宮川膽齋頼安の私塾の門人であった。また、清水広博は、明治16年(1883)東頸城郡長を勤めたが、宮川頼徳は清水のもとで東頸城郡役所書記を勤めた。本来、清水家の内輪でやりとりされたものがここに収録されているのは、そのような繋がりによると思われる。ここには、清水大内蔵(広博)が長州戦争の際、陣中より父主税助広居に宛てた書状が多数含まれる。年不詳のものが大半であるが、大坂・広島・兵庫・海田市からだされたこと、広博が「大内蔵」を名乗っていることから、慶応元～2年(1865～66)にかけてのもとわかる。また、広居は慶応2年8月16日、現職の中老として江戸詰の最中に急病死している。突然のことに、まだ陣中にあった広博は急遽帰国し、慌ただしく遺品分与等の手続きをした様子が窺える。その他に、天保12年(1841)に夭折した清水新九郎(松寿院)の葬儀関連記録、仏事関連の覚書等がある。

二つ目は、宮川谿之助に宛てた新当流、制剛流、観流の免許状・極意書である。宮川谿之助頼徳は、十郎左衛門義忠の三男であったが、男子のない長兄頼安(膽齋)の養子となった。養父頼安は、関川関所詰・書物役等を経て、病を理由に隠居を許された後、藩内の文武振興に尽力した人物である。水戸学者でもあり、甲州流軍学・観流刀術に精通し、自ら開設した精義塾で藩士の指導に当たった。息子の頼徳が諸派の武術を会得しているのも、そのような背景によると思われる。また、観流の免許状に発行人として名を記す宮川義該は、「膽齋義該」とも名乗っている。頼安が観流刀術の達人であったこと、年代の一致などから考えて、義該と頼安は同一人物である可能性が高い。

三つ目は、宮川頼徳によって書かれた本と、それに伴う諸史料である。宮川頼徳は、明治藩政において諸役を務めた後、東頸城郡役所・直江津貯蓄銀行高田支店にも勤務した。本格的な執筆活動を始めたのは、明治30年(1897)以降のことである。当史料群中では、明治維新後の町の沿革を記した「高田栞」「直江津繁昌記」「高田富史」、榊原政令の威徳をまとめた「本所侯偉績考」、頼徳が住む中頸城郡高城村出身者の日露戦争従軍記を集めた「武揚録」等がある。中でも、明治40年(1907)に編まれた「武揚録」は、資料収集・編集段階からの経緯が窺われて興味深い。頼徳は従軍者または遺族一人ひとりに依頼文を出し、履歴書・勅語・感状・謝状等を送ってもらうという方法で資料を収集した。そのため、資料中には、依頼に応じて送付された履歴書類が多数含まれる。戦争が終わった翌年のことでもあり、実際に従軍した人々による生々しい記録を見ることができる。ところで、これら頼徳の著書には、「蚊睫巢遜齋」の名で緒言が寄せられているものがある。明治30年前後に、過去の分限帳や藩士名簿を謄写・増補したのも「宮川遜齋」という人物である。「遜齋」は頼徳の号である。

四つ目は、写本・版本の類である。宮川家では、履歴書・兵法書・謡曲本等、多数の本が蒐集されている。中でも兵法書が多いのは特徴的で、宮川家の人々の武芸への関心の高さが窺われる。これらの本には、頼徳・膽齋の他に、宮川頼誼(文政期)、善英・義英・義該・義維(いずれも幕末期)の蔵書印が捺されているが、これらの人物については未詳。

この他、膽齋による幕末～明治の諸記録、頼徳の勤役日記、新聞記事や号外、私信等があ

る。

これらの史料は、平成 10 年（1998）原蔵者により、当時の上越市史編さん室に寄贈された。また、これより先、昭和 27 年（1952）に高田図書館へ 367 点の史料が寄贈されていたが、平成 24 年（2012）公文書センターへ移管されたので、ここに併せて目録を作成した。



「御当家御武器之図」上田常保  
(天保 11 年 8 月)